

過去のいじめ経験が現在の対人関係に及ぼす影響

—いじめ当事者認知と同調性に着目して—

GH081003 : 浦 洋 平

指導教員 : 石井宏祐講師

問題・目的 いじめを経験することは心身共に長期的な影響を及ぼすこととなる(坂西・岡本2004)。なかでも被害経験は対人緊張だけでなく、度合いによってはPTSDの症状もみられる(山本2006)。そこで本研究はいじめ経験が対人関係にどのような影響を及ぼしているのか検討していく。

坂西(1995)はいじめの被害経験によって自尊心が低下することを明らかにしている。いじめによって自尊心が低くなると、主張性スキルが不足していくことが考えられる。そして主張性スキルが不足していると認識する者は、同調行動をとることで社会的適応を得ることがある(坂本1999)。つまり自尊心を低く持つと考えられる被害経験者は同調性が高く現れることが考えられる。他者関係で柔軟に同調行動をとることは大切だが、心理的距離をとる一方での同調行動は精神的不安定が起りやすいとされている(上野・上瀬・松井・福富1994)。そこで本研究では被害経験が同調性にどのような影響を及ぼしているのかを検討する。

傍観者はどのような認識を持っているのだろうか。傍観者の心理として山崎(1985)は、下手に介入することで自分が標的にされるのはかなわないために傍観に徹すると報告している。つまり傍観者はいじめに対して否定的でありながらも、被害者になることへの恐怖から黙認せざるをえない心境にあるといえる。こうした背景を考えると、傍観者経験者はいじめに遭遇した際、手出しすることへの危険性を考えやすいことが予想できる。そのため、傍観経験者は傍観経験のない者に比べて、現在いじめに遭遇した場合においても傍観行動を選びやすいことが考えられる。

被害経験者はいじめを振り返ってみて加害者や、その周りにいた傍観者や観衆に対してどのように感じているのだろうか。傍観者や観衆は直接いじめに加担しないが、その存在は加害者の攻撃をエスカレートさせやすい(森田・清永1994)。そうなってくると被害経験者は、現在のいじめ当事者認知においても加害者だけではなく傍観者、観衆

に対して、被害経験がない者に比べ否定的な認知が高く現れやすいことが考えられる。

加害経験者が再びいじめ場面に遭遇したらどのような認識をもつのだろうか。原田(2008)によると加害者はいじめを行う際「被害者にはいじめられて当然の理由がある」と思っており、被害者にも原因があると感じているという。それをあわせて考えると、いじめの加害経験者は加害経験のない者に比べ再びいじめに直面した場合いじめの抑制をしにくいことが考えられる。

本研究では以下の仮説を設定して吟味することにする。仮説1：いじめ被害経験者は被害経験のない者に比べて同調性が高く表れるだろう。仮説2：いじめ被害経験のある者は現在の当事者認知においても加害者だけではなく傍観者、観衆に対して、経験がない者に比べ否定的な認知が高く現れやすいであろう。仮説3：いじめの被害経験のある者はいじめ経験のない者に比べ再びいじめに直面した場合いじめの抑制はしにくいだろう。仮説4：いじめの加害経験のある者は加害経験のない者に比べ再びいじめに直面した場合いじめの抑制はしにくいだろう。

方法 A大学、B大学、C専門学校の学生191名。質問紙調査法を実施。同調性については初川・加藤・菅野(2007)による仲間関係同調態度尺度を用いた。同調に関する28項目の各質問に対し5段階で評定を求めた。いじめについて蔵永・片山・樋口・深田(2008)によるいじめの事例文を参考に作成したシナリオを提示した。シナリオ内での加害者であるA、被害者であるB、観衆、傍観者に対してどのように感じるか、林(1978)による特性形容詞尺度を用いて訊ねた。また、いじめ場面に遭遇した場合とりうる行動を16項目作成し、5段階で評定を求めた。そしていじめ経験の有無について訊ねた。

結果・考察 因子分析によって得られた下位尺度の素点について平均値を算出し、下位尺度得点

とした。またそれぞれの内的整合性を確認するために α 係数を算出した。同調性尺度は「不安的同調」で $\alpha=.83$ 、「肯定的同調」で $\alpha=.76$ 、「相補的同調」で $\alpha=.51$ 、「権力的同調」で $\alpha=.70$ であった。いじめ対処尺度については「傍観行動」で $\alpha=.94$ 、「いじめ抑制」で $\alpha=.79$ 、「いじめ支持」で $\alpha=.81$ であった。特性形容詞尺度における被害認識は「行動力」で $\alpha=.82$ 、「社交性」で $\alpha=.60$ 、「人柄」で $\alpha=.52$ であった。加害者認識で「人柄」で $\alpha=.59$ 、「社交性」で $\alpha=.82$ 、「行動力」で $\alpha=.62$ であった。観衆認識では「人柄」で $\alpha=.88$ 、「行動力」で $\alpha=.75$ であった。傍観者認識では「人柄」で $\alpha=.87$ 、「行動力」で $\alpha=.69$ であった。

仮説1である「いじめ被害経験者は同調性が高く現れるだろう」を明らかにするために、同調性を従属変数とする対応のない t 検定を行った。その結果、有意差はみられなかった($t(150)=1.98, n.s.$)。むしろ「休みの日にいつものメンバーで遊びに行く予定があると、うれしい」など他者関係において必要となる「相補的同調」因子においては被害経験よりも被害経験のない者に高く表れた($t(159)=2.52, p<.05$)。仮説とは逆の結果となった。熊谷・杉山(2003)によるといじめ被害経験によって低下させられた自尊感情は、深い友人関係を回避するようになるという。つまりいじめ被害経験を持つことにより自尊感情が低下し、他者に対する深い関わりをも回避するようになってしまい、相補的同調性が低下することになったのではないだろうか。以上のことから仮説1は支持されなかったものと考ええる。

仮説2である「過去に傍観者を経験している者は再びいじめに遭遇した場合においても傍観行動を選びやすいだろう」を明らかにするために、傍観行動得点を従属変数とする対応のない t 検定を行った。その結果、傍観経験のある者はない者に比べて再びいじめに遭遇した際に傍観行動を選択しやすかった($t(160)=4.37, p<.001$)。これは山崎(1985)による傍観者の心理と一致するものと思われる。つまりいじめの標的から回避するには結局傍観行動を選ばざるを得なかったかったため、傍観経験のない者より傍観行動を選択しやすかったと考えられる。よって仮説2は支持された。

仮説3である「いじめの被害経験のある者はいじめ経験のない者に比べ再びいじめに直面した場合いじめの抑制はしにくいだろう」を明らかにす

るために、加害者認識得点、観衆認識得点、傍観者認識得点を従属変数とする対応のない t 検定を行った。その結果、どの立場においても有意な差は認められなかった。伊藤と宮下(2004)によると友達から拒否されることへの不安は小学校、中学校、高校と環境が変化するにつれて他者との関係も変化し、心の負担を軽減し得ることがあるという。いじめにおいてもこの報告と同じ作用がみられ、進学し関係性が変化することによって、否定的な認識も減少したのではないだろうか。よって仮説3は支持されなかったものと考ええる。

仮説4である「いじめの加害経験のある者は再びいじめに直面した場合いじめの抑制はしにくいだろう」を明らかにするために、いじめ対処尺度における「いじめ抑制」因子を従属変数とする対応のない t 検定を行った。その結果、加害経験者は加害経験の無い者に比べて有意に抑制行動を行わない結果となった($t(161)=2.77, p<.01$)。そして本研究ではいじめ抑制をしにくい理由を検討するために、いじめ被害者に対する認識得点を従属変数とする対応のない t 検定を行った。その結果、加害経験者はいじめ経験のない者に比べて被害者の「行動力」因子において有意に低い認識を示した($t(58)=2.08, p<.05$)。つまり、いじめ加害経験者は被害者の行動力に対して低い認知を持つために、いじめ抑制行動をとらなかったと考えることができる。よって仮説4は支持された。

引用文献

- 原田正文(2008):友だちをいじめる子どもの心がわかる本 講談社
 伊藤美奈子・宮下一博(2004)傷つけ傷つく青少年の心 北大路書房
 森田洋司・清永賢二(1994):いじめ-教室の病い- 金子書房
 坂西友秀(1995):いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究 第11巻 第2号 pp.105-115
 坂西友秀・岡本祐子(2004):いじめ・いじめられる青少年の心 北大路書房
 坂本剛(1999):中学生の学級集団における同調行動と適応についての一研究 名古屋大学紀要 第46号 pp.205-216
 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護(1994):青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究 第42巻 第1号 pp.21-28
 山本睦美(2006):いじめのPTSDと自尊感情との関連 臨床教育心理学研究 第32号 p.59
 山崎森(1985):いじめの構造 株式会社ぎょうせい
 熊谷集・杉山憲司(2007):いじめ・いじめられ経験と仮想的有能感・自尊感情の連続性 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集 第16号 pp.166-167